

I テサロニケ 2:1-12 「父、母、そして幼子のようにして。」

2020/04/19 昭島教会礼拝

昭島教会のみなさんおはようございます。

- 今日はこうして、物理的には離れた場所ではありますが、礼拝を共にして、御言葉を分かち合えることを感謝いたします。

1 福音を委ねられた者として、相応しく語る態度。

- 今日はテサロニケ人への手紙を開きました。

テサロニケというのは今のギリシャの東海岸に位置しています。たくさんの人々が行き交い交易が盛んな町で、当時はマケドニアという地方の都市でした。マケドニアは、世界史で言えば、かつてアレクサンドロス大王を出したところでもあります。

みなさんは、今週はどこで、どのようにして過ごされる予定でしょうか。このような情勢の中、ご自宅で過ごされるという方が多いかもしれません。ほんの少し前までは、全く想像もしなかったような日常を、私たちは送っています。少しのことにイラついてしまう。一緒に暮らしている相手との時間も長くなりますから、素の部分がかかなり勢いよく出てくることもあるかもしれません。

しかしそれでも、イエス様は私たちがそれぞれの場所に福音を伝えるために、神様の愛を表し、その場所を慰め、励まし、平和を作るために、私たちが遣わしてくださっています。

パウロはテサロニケの街を、2回目の伝道旅行の時に訪れています。その時のことが使徒の働きを見るとわかるのですが、実はパウロがテサロニケを訪れた時、それは必ずしも、計画通りにいった、すべて順調だ、とはいえない滞在でした。

彼はテサロニケに来る直前、ピリピという町でとっても理不尽な扱われ方をします。公正な裁判もなく、人々の前で鞭で打たれ、牢獄に入れられた。パウロは2節で「ピリピで苦しみにあい、辱めを受けていた」と振り返ります。

悶々とした怒りや、後悔、悲しみ、そういう感情をまといながら、彼らはテサロニケに到着したのかもしれませんが。そうして始まったのがテサロニケ伝道です。そしてここでも、うまく行ったとはいえない滞りになってしまった。

しかしそれでも、主の恵みによって、教会は成長を続けていきました。そういう教会に、パウロはこの手紙を書きました。このテサロニケ人への手紙第一は、苦難の中を通らされてもなお成長を続けるテサロニケ教会を喜び、励ます内容になっています。

あの時、テサロニケの人たちに、福音をどのような姿勢で自分が伝えたか。パウロは3つ、あげています。それが今日のタイトルにもしました。「父のように、母のように、そして幼子のように」です。

まず7節。「あなたがたの間で、幼子になりました」。福音を伝える側としての権威を主張せず、教えてあげますよという態度をとらなかった。あるいは5節と6節もそうですね。話を聞いてくれる人に媚びるようなことはせず、一方でこの話をしてあげるから代わりに食べ物ください、お金をください、という下心ももたず、そして、パウロ先生の話わかりやすかったですねー！！という賞賛も求めない。

そして同じ7節。「自分の子どもたちを養い育てる母親のように」。これは8節から10節をもう一度読みましょう。"あなたがたをいとおしく思い、神の福音だけではなく、自分自身のいのちまで、喜んであなたがたに与えたいと思っています。あなたがたが私たちの愛する者となったからです。兄弟たち。あなたがたは私たちの労苦と辛苦を覚えているでしょう。私たちは、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。また、信者であるあなたがたに対して、私たちが敬虔に、正しく、また責められるところがないようにふるまったことについては、あなたがたが証人であり、神もまた証人です。" テサロニケ人への手紙 第一 2章8～10節

そして3つ目に。11節。「父親のように」。"ご自分の御国と栄光にあずかるようにと召してくださる神にふさわしく歩むよう、勧め、励まし、厳かに命じました。" テサロニケ人への手紙 第一 2章12節

何を話す時にも、何を伝えるときにも、伝えている人がどんな姿勢であるのかも含めて、受け取る側は判断しますよね。パウロは、福音を委ねられた、伝える者としてふさわしい姿勢を保つのに努力した。心をお

調べになる神様に喜んでいただくこうとして、語った。

具体的にどんな態度だったか。それが父のように、母のように、幼子のようにして、福音を伝えた。

今年の2月の終わりに、9日間の日程でタイの北部へ、宣教地視察ツアーに行ってきました。そこで働かされていた宣教師の先生たちのお姿は、父のようであり、時に母のようであり、そして幼子のようでもありました。今日はこれからツアーに行ってきた方達の証詞を聴きながら、宣教師たちに表されている父、母、幼子がどんな姿であったのか。一緒に受け取っていきたいと思います。

タイツアーの報告

概要 星加

タイ宣教地視察ツアーは今年の2月20日～29日にかけて行われました。参加したのは私合わせてこの6人のメンバーです。

この新型コロナウイルスの感染が広がる中、ツアーを実施するかどうか。教団の責任役員会で話し合われ、中止であっても実施であってもどちらであったとしても信仰を持った決断だったわけですが、今回は実施するということになりました。

3組の宣教師を訪問しました。チェンマイで、野尻孝篤先生の後を引き継いで日本人教会を牧会しておられる長谷部愛実先生。チェンライで少数民族の子どもたちを引き取って、児童擁護施設を開いて活動してお

られる平山輝明先生、廣恵先生。そして、ウィエンケンで、クム族という少数民族の人たちとともに歩んでおられる額賀順二先生、ひとみ先生です。

それでは、郷枝実姉、石川愛兄、鯨岡ひかり姉の順番で証詞をお聞きください。

- チェンマイ 郷枝実姉
- チェンライ 石川愛兄
- ウィエンケン 鯨岡ひかり姉

2 今置かれた場所は、神が導いてくださった場所。

今日も、そして今週一週間も、私たちは先の見えにくい、不安な中を歩みます。自分が願ったわけではない状況を、私たちは今日も歩んでいます。

しかしここもまた、神が導いてくださり、神が支えてくださっている場所なんだという確信をもって、歩ませいただきます。

今日の1節を読みます。兄弟たち。あなたがた自身が知っているとおりに、私たちがあなたがたのところに行ったことは、無駄になりませんでした。テサロニケ人への手紙 第一 2章1節

テサロニケに行く前、パウロたちが訪れたのはピリピという街です。初めは順調でした。パウロたちの話を聞きたいという人がいて、そして救いがどんどん起こされていく。しかし事件が起こります。伝道の結果、

パウロたちは突然捕らえられて、公衆の面前で鞭で打たれ、牢屋に一晩入れられてしまいます。

しかし、その牢屋の中でも神様の不思議な守りがあって、その牢屋の看守と家族が救われます。賛美をしていると大きな地震が起こり、囚人たちの鎖が外れて、看守たちは囚人たちが逃げてしまった、あぁもうこれは終わりだ、と自害しようとしたら、パウロたちは逃げていなかった。「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族救われます」というあの出来事です。

しかしそれでもなお、鞭で打たれたことと、牢屋に入れられたことは、パウロにとっては納得のいかない、理不尽極まりない出来事でした。彼は次の日、嚴重に抗議をしています。

良い気持ちで、とはとても言えない。悶々としながら到着したのが、テサロニケの町でした。そしてここでも結果、彼らはユダヤ人たちから妨害に遭って、夜中に逃げるようにして、テサロニケを後にしなければならなかった。しかし1節。「私たちがあなたがたのところに行ったことは、無駄になりませんでした。」

神の導きには、いつも二つの要素があると思います。1つ目は、自分から進んで、意思を持ってということです。その場所のために思いが与えられ、願わくばそこに行かせてくださいという祈りが起こされていく。あるいはすでに今いる場所を、自分から進んで捉え直していく、ということです。もう一つは、自分の意思に関係なく、という要素です。それはイエス様が十字架に書かれる前、イエス様がご自分の意思とは関係なく、引き渡され、毛を刈られる羊のようにして十字架へ引かれてい

ったように、、です。

神様が導かれていくこともあれば、あるいは誰かの罪の犠牲になって、神様の御心ではないところで、苦難に引き渡されて、、ということもあるかもしれません。しかし、あらゆることを働かせて神は、益としてくださるお方です。ツアー中、平山廣恵先生がこんなことをお話してくださいました。

どんな人が宣教師になるのか。宣教師になりたくてなりたくて、、祈ってきたという人もいれば、この人は優秀で、語学にも長けていて、あー、宣教師にふさわしいなという人もいる。あるいは、なんで私が今この国に遣わされているのか、不思議です。。ということもある。

しかし、実際に宣教地で長く用いられるのは、、「なんで私が、、」「自分の願った通りでなかった」という証詞を持っている先生の方が、多いように思う。最初から宣教師になりたい！！と希望していた人は、不思議なんだけどいろいろな事情で帰国せざるを得なくなることが多いように思う。

3 神が、今日もこんな私を認めてくださっている。

パウロは、「私たちは神に認められて、福音を委ねられた」と言いました。神が福音を委ねたのは、特定の誰かにだけではありません。今週もそれぞれの場所で過ごす私たち一人一人を、神様は認めてくださって、福音を委ねてくださっています。

イエス様は苦難を前にした弟子たちに、こう言われました。

"あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。" ヨハネの福音書 15章16節

もしかしたら、あなたの周りの人、全員があなたを認めることはないかもしれません。そして自分で自分を認める、ということもなかなかできないかもしれません。。私なんかとてもとても、もっとふさわしい人が。

しかし神があなたを認めてくださって、福音を委ねてくださっているのです。だから、主にあって、自信を持ちましょう。誠実な行いに取り組みましょう。それぞれの場所で、父のように励まし、勧める。母のように相手を養い育て、慈しむ。そして幼子のように純粋に、時に周りの人の助けをいただきながら、教えられていく。予期しないことに引き渡されている、今の日常です。私たちはこの中にあっても神に認められ、福音を携えているお互いです。今週も主の恵みとともに出ていきましょう。